

氏名	村上 貴典
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博乙第 4265 号
学位授与の日付	平成20年9月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	Routine Transurethral Biopsy of the Bladder Is Not Necessary to Evaluate the Response to Bacillus Calmette-Guerin Therapy (BCG膀胱内注入療法の、効果判定目的のルーチンな経尿道的膀胱生検は、必ずしも必要ではない)
論文審査委員	教授 中山 睿一 教授 松川 昭博 准教授 児玉 順一

### 学位論文内容の要旨

今回、我々は、表在性膀胱癌に対する Bacillus Calmette-Guerin (BCG) 膀胱内注入療法後の効果判定目的の、ルーチンな経尿道的膀胱生検の必要性について検討した。表在性膀胱癌に対し、週1回の BCG 膀胱内注入療法を6~8コース施行した84名の患者を対象とし、BCG 注入療法前の病理組織学的所見、BCG 膀胱内注入療法後の、尿細胞診、膀胱鏡所見、膀胱生検結果につき検討した。BCG 注入療法後の尿細胞診が陽性であった19例は、膀胱生検で全例に膀胱癌を認めた。尿細胞診が陰性で、膀胱鏡にても、明らかな腫瘍が認められなかった54例中53例(98.1%)は、膀胱生検にても膀胱癌を認めなかった。また尿細胞診が陰性である場合には、膀胱鏡にて発赤粘膜を認めても、癌の再発、残存を示す指標とはならなかった。膀胱鏡にて明らかな腫瘍を認めず、尿細胞診が陰性であれば、BCG 膀胱内注入療法後の効果判定目的の、ルーチンな経尿道的膀胱生検は、必ずしも必要でないと考えられた。

### 論文審査結果の要旨

本研究は、表在性膀胱癌に対する Bacillus Calmette-Guerin (BCG) 膀胱内注入療法後の効果判定を目的とした経尿道的膀胱生検の必要性について検討したものである。84名の患者を対象とし、BCG 膀胱内注入療法後の、尿細胞診、膀胱鏡所見、膀胱生検結果につき検討し、尿細胞診陽性19症例には、膀胱生検で全例に膀胱癌を認め、尿細胞診陰性症例54例中53例(98.1%)には、膀胱生検でも膀胱癌が存在しないことを明らかにした。この知見は、膀胱鏡で明らかな腫瘍を認めず、尿細胞診が陰性であれば、BCG 膀胱内注入療法後の効果判定目的の、ルーチンな経尿道的膀胱生検は必ずしも必要でないことを示しており、膀胱癌治療の臨床上、重要な知見であり、価値ある業績であると認める。よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。